

平成5年10月15日
NO.11

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター ☎ 05965-2-1732
〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503 FAX 05965-2-3724

現場だより1

上野市外山

伊賀国府跡



今回の調査は、No.6でも紹介しました伊賀国府跡の、主として推定政庁^{せいちょう}の範囲を確認するためのもので、特に政庁域を区画する施設の発見に努めました。

その結果、推定政庁は、政庁の建物を囲む柱列や溝が方形に巡らされていることがわかりました。検出された柱列から一辺40m余りの範囲が考えられます。柱列は、南側にあたる政庁の正面で門跡と接続するものと思われます。

また、柱列の3～4 m外側に柱列にほぼ平行して溝が見つかりました。この溝は政庁の東側と南側で明らかになりましたが、必ずしも政庁の四周を区画するものかは不明です。さらに、東側脇殿の一部も見つかっており、径40cmほどの太い柱の根元近くの部分が遺存していました。

多量の出土遺物のなかには、緑釉陶器をはじめ、土師器・須恵器・黒色土器・白色土器などの土器類や、円面硯や馬歯、鉄滓などもあり、奈良～平安時代のものとみられます。また、墨書された須恵器が、2点出ていて、1点は「国□」もう1点は「阿」と書かれています。また「安」と線刻された須恵器も2点出ています。「国□」は、「国府」と読めるかもしれませんが、「国厨」と読む可能性が強く、「国厨」ならば国庁の食料等を管理する機関の意味になり、どちらにせよ大変重要な発見になりました。

墨書の「国厨」は、下野国府跡や相模国府に関わる遺跡の可能性のある稲荷前A遺跡、周防国府跡や薩摩国府跡など、国府に関連する遺跡から見つかっています。

他に、政庁付近からの出土ではありませんが、注目すべき遺物として、銅鏡片があります。この鏡は小片ですが、長岡京や正倉院などでみられる八稜鏡に相当する可能性が強いものです。

今回の調査で、政庁を囲む柱列の発見や、「国」という表現のある墨書土器の出土などから、伊賀国府跡であることを決定づけたといえます。また、政庁周辺で炭とともに多くの10世紀後半代の土器が完形のまま廃棄された箇所があり、あるいは当地における国府が、この時期に廃絶され、他所に移動していったのかもしれない。

(竹内)



東脇殿の柱跡



墨書土器

センター日誌抄

- | | |
|-------------------------------|---------------------------------|
| 6/22 (火) 埋文担当者会議 (嬉野町、美杉村) | 8/15 (日) ~22 (日) 鈴鹿市埋蔵文化財展に資料貸出 |
| 6/23 (水) 愛知県立芸術大学来訪 | 8/18 (水) 嬉野町文化財保護委員会 (嬉野町) |
| 6/24 (木) 大山田村分布調査指導 (大山田村) | 8/19 (木) 大宮町調査指導 (大宮町) |
| 6/25 (金) ~11/10 (水) | 8/23 (月) ~24 (火) |
| 松阪市記念特別展に資料貸出 | 高田高校地歴部、大古曾遺跡体験発掘 |
| 6/28 (日) 皇学館大学来訪 | 8/26 (木) 津市立片田小学校、松多バイパス来訪 |
| 7/7 (水) 立命館大学来訪 | 8/27 (金) 松阪女子高校郷土研究会松多バイパス来訪 |
| 7/8 (木) 栃木県立博物館来訪 | 9/4 (土) 津市公民館事業、大古曾遺跡見学 |
| 7/13 (火) ~14 (水) 袋井市教育委員会来訪 | 9/7 (火) 沖縄県北谷町職員来訪 |
| 7/30 (金) 町村 (多気町) 職員研修終了証書交付式 | 9/7 (火) 慶応大学考古学研究会来訪 |
| 8/4 (水) 多気郡教研社会科部会来訪 | 9/16 (木) ~17 (金) |
| 8/11 (水) 名古屋市立博物館来訪 | 全国公立埋蔵文化財センター役員会 (苦小牧) |

大垣内遺跡



掘立柱建物（総柱）



井戸



ヘラ・墨で字の書かれた土器

津市一身田町にある専修寺（高田本山）と大沢池とに挟まれた水田地帯の西方にひろがる大垣内遺跡は、県道津関線の道路建設にともなって新たに見つかった遺跡です。この周辺は、近年発掘調査が増加しており、地域の歴史も除々に明らかになりつつあります。また、大里窪田町という地名が現在でもありますが、奈良の都平城京からも同じ“久苦多里”と書かれた木簡が出土していたり、平安時代以降文献にたびたび“窪田荘”“窪田郷”という言葉が登場するなど、古代から中世にかけて開かれた地域であったと考えられており、発掘調査にも期待がかけられています。

5月の連休明けから8月までに、調査範囲6,600㎡の約半分が終了しましたが、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物10数棟、井戸、川の跡などがみつかっています。掘立柱建物は、規模も大きくしかも整然と計画性を持って建てられているようで、一般の集落とはやや趣が異なるようです。また、井戸からは、ヘラや墨で字が書かれた土器が、川の跡からは、円面硯・土馬・軒丸瓦なども見つかり、遺物からもその裏付けができそうです。特に、ヘラで字が書かれた土器は県内でも齋宮跡などからみつっていますが、貴重な資料といえます。日用品に字を書くことに一体どんな意味があったのでしょうか。

長梅雨と台風の襲来とで、調査も思うようにはかどりませんが、残り約半分の調査でさらに資料の増加を期待しています。（服部）

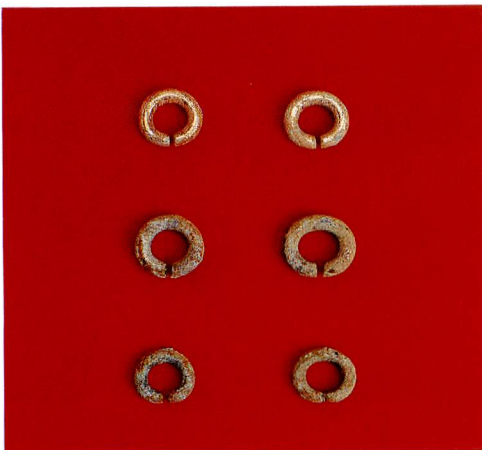
小屋城古墳群



1号墳石室（全景）



1号墳奥壁（遺物出土状況）



耳飾り（金環）

小屋城古墳群は、穴倉川^{あなくら}の左岸の丘陵中腹にあります。「なぜ、こんな場所に古墳が…」狭い谷間に面した調査現場に立つと、そんな思いにかられます。

周囲には450基以上の古墳が集中する長谷山古墳群^{はせやま}などがありますが、小屋城古墳群では、現在3基の古墳が確認されています。この内今回は、県道改良事業によって、1・2号墳を調査しました。

1号墳の大きさは、おおよそ南北16m、東西17mで、円墳と考えられます。埋葬施設は石室で、大きさは幅約1.8m、長さは7mありました。しかし近世以降石材として石を持ち出したようで、かなり壊されていました。

2号墳の石室の幅は1.4mで、1号墳に比べてやや小さいものです。やはり、かなり壊されており、古墳の形はわかりませんでした。

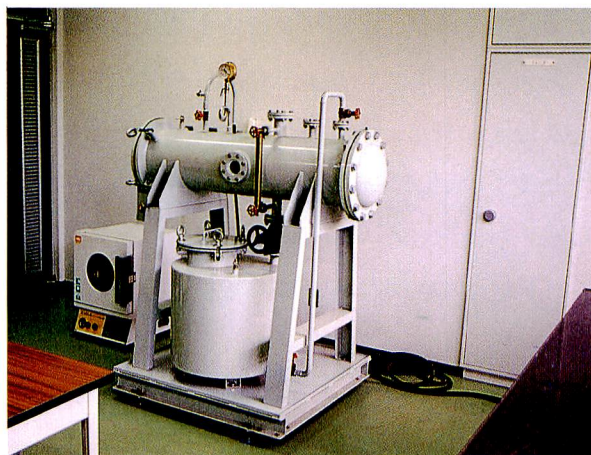
出土した遺物から、1号墳は7世紀前半頃に造られたことがわかり、2号墳もほぼ同じ頃と考えられます。

1号墳の石室からは、須恵器^{すえき}の壺や杯身・杯蓋^{つきみ つきがた}などが出土しました。これらは、奥の壁に並べたように置かれていましたが、お供えと考えられます。またこれらの土器の中には、ベンガラ（朱色の塗料）で「+」の記号がつけられたものがありました。

他には、3対の耳飾りも出土しました。このことから、石室には少なくとも3人が葬られたことがわかります。

今回の調査によって、周囲が見渡せない谷間にも古墳の造られたことがわかりました。古墳群の形成を考える重要な資料となりました。（小林）

発掘調査によって出土する遺物には、土製品・木製品・金属製品・石製品・ガラス製品などがあります。これらのうち、土製品・石製品・ガラス製品は通常的环境下で保存しても変形したり腐食したりすることはありません。しかし、木製品は自然状態で保存すると、乾燥により収縮・変形します。また、金属製品はサビが進行し脆くなります。そこで、これらの出土品を保存す



るためには科学的な保存処理を行う必要があります。木製品については、本通信No.4で紹介しましたように保存科学室1で処理を行っています。今回紹介します保存科学室2は、金属製品の処理を行う部屋です。この部屋は当センター1階の北東隅にあり、30㎡の室内には保存処理に使用する色々な装置や薬品があります。では、保存処理の工程と主な装置の説明を簡単に紹介します。

保存処理を行う時は、まず事前に金属製品の材質・構造・サビの原因などを調べると共にイオンメーターにより遺物に含まれる塩化物イオンを測定し処理方針を決定します。同時に、写真や実測により現状の記録を取ります。次に処理方針に従って処理作業を行います。主な作業としては、土や石などの付着物を除去した後、サビの原因である塩化物の処理（脱塩処理）や進行する可能性のあるサビの除去を行います。脱塩処理の方法にはいくつかありますが、当センターではステンレス製の脱塩処理槽を使い蒸留水に浸して行います。蒸留水は純水製造器で作ります。サビ取りには、ペンチなどの工具やより細かい作業を行うために小型精密グラインダー・精密噴射加工器（エアブレイシブ）を使用します。次に強化と腐食抑制のためにアクリル系合成樹脂を減圧含浸させます。減圧含浸とは、金属製品を減圧含浸装置（写真）のなかで一度真空状態にした後、樹脂を送り込み金属製品の内部にまで樹脂を浸透させる方法で、必要に応じて繰り返し行います。最後に接合などの修復処理を行います。さて、以上のような処理を行っても完全にサビの進行を止めることは出来ず、その後の保管に際しても湿度などの環境を制御して保存する必要があります。また、処理方法の記録や定期的な観察など処理後の記録・調査も大切なことです。

その他の主な装置には、金属製品に含まれる水分を除去する恒温乾燥機、湿度調整が出来るドライキャビネット、室内の換気を行うポータブルファンなどがあります。（森川幸）

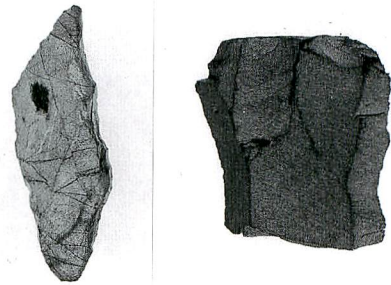
津市で始めて発見された旧石器遺物 —大古曾遺跡— (中勢道路の発掘から)

大古曾遺跡は、津市一身田大古曾^{おごそ いっしんでん}にあり、3つに分けた調査区のうち真ん中のB地区はすでに調査を終了しています。今回はA地区とC地区の調査を行いました。

A地区は飛鳥～鎌倉時代にかけての多数の掘立柱建物が見つかった橋垣内遺跡^{はしがいと}の南隣りにあります。調査の結果は予想通り橋垣内遺跡につながる建物群が確認され、同時にこれより南は浅い谷地形となってB・C地区とは地形的に区分されるということもわかりました。

C地区でもA地区と同様の掘立柱建物が数棟確認されましたが、ここで最も注目されるのは津市内の発掘調査では初めて確認された旧石器時代(約1～50万年前)の遺物(写真右)です。左はナイフ形石器と呼ばれるもので、後期旧石器時代(約1～3万年前)に作られたものです。右は縦長剥片^{はくへん}と呼ばれるもので、石を割って石器を作る途中の段階のものです。これまで津市の歴史は弥生時代(約2千年前)から語られることが多かったのですが、最近の発掘調査で縄文時代創草期(約1万年前)まで、さらに今回の発見で後期旧石器時代にまで遡ることが確認されました。

また、夏休みを利用した高校生の体験発掘(写真下)も行われ、貴重な発見に「歴史が書き換えられていく瞬間を目のあたりにしたような気がしました」といった感想も寄せられました。(山口)



左：ナイフ形石器、右：縦長剥片(ほぼ実寸)



体験発掘の様子

第13回三重県埋蔵文化財展「伊勢志摩をめぐる考古学」開催のおしらせ

内容：伊勢志摩地域の歴史を旧石器時代から江戸時代まで考古遺物により紹介します

期間：平成5年11月24日(水)～12月5日(日) ただし11月29・30日は休展

場所：伊勢市立図書館 2階 視聴覚室(伊勢市駅から徒歩15分)

記念講演会：講師＝名古屋大学名誉教授 榑崎 彰一 先生
名古屋学院大学教授

演題＝「伊勢志摩をめぐる古代・中世のまつりの器」

期日＝11月27日(土) 14時から

場所＝伊勢市福祉健康センター 3階 大会議室

なぜ？なに？コーナー 8 (遺構編その5)

今回から4回にわたって、遺跡で発見される「墓」について紹介します。

Q： どうして死んだ人が埋めてある墓をしらべるの？

A： 墓は死んだ人のもので、生きている人には関係がないと思うかもしれませんが。でも、墓を作ったり、そこに死んだ人を葬ったりするのは、生きている人なのです。あたりまえのことですが、生きている人がいなくては墓はできないのです。

墓には、その時代に生きていた人々や社会のことについての情報が、いっぱいつまっているのです。

Q： 墓をしらべると、どういうことがわかるの？

A： 骨がみつかり、男か女か、何才ぐらいの人か、どうして死んだのかなどがわかることがあります。骨がみつからなくても、墓の大きさや供えられている品物などによって、葬られた人が大人か子どもか、どれぐらいの身分の人か、どういう暮らしをしていたのかなど、だいたいの検討がつかます。

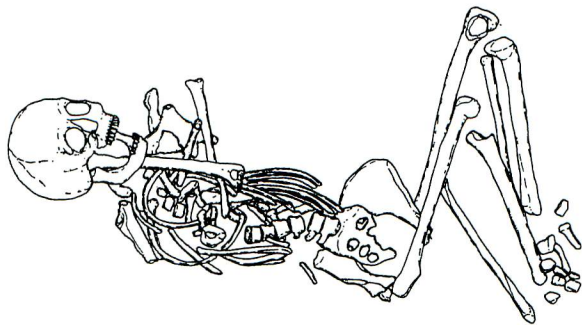
しかし、もっと大事なことは、その時代の人のくらしぶりや、考え方までわかるということです。

墓は人間しかつくりません。死んでしまった家族や仲間をたいして、特別の感情をもち続けることができるのは人間だけです。

地球上に人間が登場して以来、いたるところで墓がつくられてきたはずですが。それらの墓は、その時代や地域の社会が豊かであったか貧しかったか、技術が高かったか未熟だったかという理由で、ずいぶん違いがでてきます。

また、その時代の、そこに住んでいる人々が、「死後の世界をどう考えていたのか」ということが、人の葬り方や墓のつくり方に大きく影響しています。

一つや二つの墓をしらべても詳しいことはわかりませんが、多くの墓をしらべ、それらを探ることによって、社会のしくみや人々の考え方の変化がわかってくるのです。



次回は、旧石器時代から弥生時代にかけての墓について紹介します。

城之越遺跡出土の墨書土器



上野市城之越遺跡は、平成3年度県営ほ場整備・農免農道整備事業に伴う発掘調査とその後の補足調査によって、多数の^{たてあなじゅうきょ}堅穴住居や掘立柱建物の他、古墳時代前期のものとしては全国的にも例をみない水源となる石組みの^{せいせん}井泉や貼石・立石を施した「大溝」が確認された遺跡です。大溝によって^{さいし}囲まれた空間は、その特異な状況や出土遺物から「祭祀を執行了場」と考えられ、その重要性から城之越

遺跡は平成5年4月に国の「名勝及び史跡」に答申されました。

今回紹介する墨書土器は、先に刊行した報告書（三重県埋蔵文化財センター『城之越遺跡』1992年）では、「建」と判読したのですが、その後、京都産業大学の井上満郎教授からこの墨書が「庭」と判読できるのではないかという御指摘を受け、あわせて字体の類例についても御教示いただきました。そこで、筆の運び等を再度検討し、井上先生にも実物を確認していただいた結果、「庭」と判読するほうが妥当との結論に達しました。

この文字は、奈良時代の須恵器杯の底部外面に一字のみ墨書されたもので、上記の大溝の最上層から出土しました。まさに、大溝がその機能を完全に停止する直前の時期です。「庭」が特定の場所を示しているのか人名なのかといった基礎的なことから検討していかねばなりませんが、もしこれが特定の場所を示しているとするならば、出土した遺構が少なくとも古墳時代には祭祀場であり、なおかつその溝が奈良時代まで連綿と続いていたことは、「かつては神事・公事の行われる場所」を「ニワ」と呼んだこと（松村明編『大辞林』三省堂 1988年）と考え合わせると、非常に興味深いものがあります。（穂積）



「庭」実用例
伏見冲敬編『角川書道辞典』

編集後記

- *今年度も半年が過ぎ、現場も約半数が終了しました。夏の長雨にたたられた前半でしたが、多くの成果が上がりました。
- *豊穡の秋を迎え、それぞれの現場、また報告書の製作にと調査員も大忙しの日々を送っています。後半期の成果にもご期待下さい。